

---

# **ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む**

スリザス

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

### 【NZコード】

N9140Z

### 【作者名】

スリザス

### 【あらすじ】

前世が日本人で異世界転生したが、村八分で貧乏極まって自殺寸前。

そんな悲惨な境遇の開き直り型主人公がひょんなことから幼女な神様の使徒に。

色々な能力を貰つてダンジョンで暴れまくり、治癒能力やアイテムで怪我人や病人を治したり、商売をして優秀な部下を得て、領地を手に入れて内政したりして活躍する予定。

しかし元の村ではあい変わらずつまらない村人たちに迫害され続け

る物語。

ただの暇つぶしの書き殴り作品です。  
ハイリスクノーリターンノークレームの軽いノリでお楽しみください。

## 第1話 胎動

よく小説とかで転生とか生まれ変わりとか聞くけど、俺はそういうものは信じていなかつた。

死んだら人間はそれまで。赤子でもわかる真理のひとつだ。

大体にそんな誰もかれもが生まれ変わっていたら、何十代もの大昔の記憶とかが延々と残つててまったく思い出さないとか実際おかしいだろ？

まあそれ以前に記憶は脳にあるもので、生まれ変わりで前世の記憶とかがある方がもつとおかしいと思つんだが……

何が言いたいかといふと……

「何で俺に前世の記憶があるんだよー」ってことだ。

前世の記憶、俺が日本という国に生まれ、牛丼のサンボでワンコインで大盛りを頼み、そして暴走トラックに撥ねられて死んだまでの人生の記憶。

気楽な小説の中では転生なんて好物ですかと言われてそうだが、自分で経験してみるとこの記憶は今の世界、なんというか異世界っぽいところでは邪魔モノでしかなかった。

何しろ赤ん坊の頃からほんやりとだが自我があつた。そのせいで日本人としての精神ではちょっと耐えにくいようなことが次々と経験させられ……

生きてる芋虫を食べさせられたのはカルチャーショックどころではなかつたよ。今では気にせず食べられるけど。

他にも笑わない子とかのレツテルをつけられ、下手に日本語の下地があるおかげで言語の習得が平均よりだいぶ遅れたり、素直に子供として振舞えないから何を考えてるかわからないとか裏で何してるかわからないとか、西洋人が日本人を、田舎の人間が都会の人間を表現するような評価をいただきまくつたり、色々と酷い人生を送つてしまつた。

日本人の知識を利用してチートしまくり?

まったく無理。

といつか無理。

絶対無理。

ちょっと考えればわかると思うが、清く正しいヘタレ日本人が中世レベルのところに転生して幸せに生きられるかと。

ほんのちょっとでも周りと違うことをするとすぐ注目される。その

注目つてのも悪い意味での注目だ。いわゆる魔女裁判のよつたな雰囲気になる。

算術が出来れば就職できる?

就職が出来るのはお偉いさんの身内とのじ機嫌をひたすら取れるクズのみ。

むしろ高度な能力なんて見せたら、拉致されて奴隸として高値で売られて一生無償で働かされるだけだ。

こじら辺のクズさ加減は、前世の世界となんら変わらない。

出来る」とと言えば周囲と同じことをするだけ。

それも力仕事ばかりで理系人間の俺にはついていけず、無理をしきて半病人のような状態で今まですごしてきた。

ま、その話は今は置いておいてもかまわない。ぶっちゃけ今そんなことを気にしてる状態じゃがない。

わかりやすく言つと「村八分されてて、親が行方不明で、我が家の経済状態が最悪で、体調も悪くて、夜逃げ寸前だけど逃げる場所も無い」という感じ。

も「どうじよ」もない。

左手に首を吊るロープがスタンバつてるんだ。

あまり仲が良いとも言えない両親は、半年前に一人で王都に出稼ぎに行つたがそれ以降なんの連絡も無い。

兄貴がいたが俺が5歳のころに魔物にやられて死んだ。

つまり身寄りが一切無い。

「おわた。人生またおわった。神様つまらない人生をありがと」

でも最後になんか美味しいものでも食べたいな。

裏手にあるみすぼらしい倉の中から売れるものとかを物色するか。

びつせ売るのも面倒になるような値段の「ハリしかないんだろ」など

……ね。

今までダルくて調べなかつたよつた物資もすべて調べまくるために、荷物は全部外に出すようにする。

かなり大掛かりな物色だ。子供の頃から探検みたいに何度もしてるのが流石にここまで大げさにしたことはない。

何か良い値段で売れるものであれば……と期待はするが、内心では殆ど諦めている。

今こつして倉庫を調べてるのも、結局は情性みたいなものだ。

でもま、何もしないよりは気が晴れる。

そしていくつかの剣や籠手やらのあまり高価でなさそうな冒険者用の装備以外はボロ布や木製のガラクタなど大したものも見つからず、最後の荷物を調べる。

「何だこの箱、重すぎる。いや、これ床に引っ付いてるのか

動かそうとしたときの感覚が、重いものとしては何か違和感を感じる。

中がまるで空っぽのような感じの頑丈な木箱の蓋を開けてみると予想外に軽く開いた。

「なんですか、コレは……」

どう見ても階段。

斜め横から見ても上から見ても階段。

多分、前と真横だと木箱にしか見えないが。

おそらく地下室へと繋がっているんであろうと思われる階段の奥は、光ゴケでも使われているのかボンヤリと明かりが見える。

いつたいその先に何があるのか。

予想その1はお宝がザックザクと。あるわけないだろと自分でツッコミられるが。

予想その2は親父の隠し酒蔵だが、隠す意味あるのか微妙？

予想その3は迷宮。うちの倉はダンジョンの上にたつていた！ わけないよね。

危険があるかもしれないのに、見つけた装備を適当に身につけてから降りることにする。

「さて、鬼が出るか蛇が出るかいっちょ行ってみるか

## 第2話 受肉

「うおおおおおおおお、凄いなこれ」

階段は予想以上に狭くて長かったが、特に問題なく最深部まで到達。

100畳以上あるような広さの部屋の入り口から中を眺めると、高価な明かりの魔道具によつて煌々と照らされる純白の石づくりの壁面、そして中心後ろよりに設置された莊厳なつくりの祭壇。

そこはまるで以前にクラスの取得のために行かされた神殿のような雰囲気がする場所だった。

ちなみに取得したクラスは 村人F である。村人にもランクがあつてFは貧民みたいなものさ。ハハハ。

あまりの光景に数分ほど呆けていたが、とりあえずお邪魔しますと小声でいいながらオズオズと部屋に入していく。

入り口からもみえていたが、祭壇の御神体はどうやら女神様のようだ、槍を持った凜々しい戦乙女のような大きな彫像が異彩を放つ。

祭壇への緩い階段を昇ると、その御神体の大きさに圧倒され、まるで実際に神様の前に連れられて右往左往するちっぽけな人間のような感覚になる。

そんな雰囲気に流されてではあるが、唯一知っているこの世界での神への祈りの聖句を思わず口ずさんで祈りをささげる。

「いあ いあ くとうるふ ふたぐん! .....」

そして何かわけのわからない達成感を得つつも、いつたん今後のことを考えるために帰るうつと祭壇を降りると、視界の隅のテーブルのよつな場所の上にさつきまでは無かつたはずの彩りが見える。

「ん? なんだ?」

一見してみると果物や肉、つていうか食料に見える。一応近づいてみるとやっぱりなぜか食料が山盛りに置いてある。しかもかなりの高級品ばかりに見える。この世界で17年生きてきたがいつも芋と雑穀と野草ばかりで、ここまでの高級品はそう何度も食べた記憶すらない。

「これつてもしかしてお供え物だよな。でも誰がいつの間に持つてきたんだ、さっきは絶対に無かったはずなのに」

せつこつて姿形がリンゴもどきのティーアゴと呼ばれる果物を手に  
とつて見る。

(「へーん、凄い良い香り。すみません、もひつ我慢できません。」)

空腹もあこまつて、つこつて口に運んでしまう。

大きなティーアゴにかじりつぶし、リンゴとオレンジの合わせた  
ようなみずみずしい味が口の中には広がって、久しづびりの美味に歓喜  
が生まれる。

それからぼもつ、俺は飢餓感に押されて壇が切れたよつて完全に無  
心のままひたすら涙を流しながら貪るよつて食い漁つた。

そして腹も膨れてもう食べられないといった状態になると、途端に  
正氣を取り戻す。

「俺はなんてことを…………神様への供え物を横取りとか、神罰下  
るわ…………」

しかし何でこんな隅のほつに供え物が置いてあるのか。

普通は祭壇の方に供えるはずでは?

もしかしてお供え前にいたん置いてあるだけか？

とつあえず食べてしまったからには仕方ない。

俺は開き直ってはみたものの、このままやってしまったことを捨て置くには堪えられない心境だつたので、自分なりの誠意を見せようと、まだ半分以上余っている食料のいくつかを見繕つて抱え、

「すみません、神様。お供え用の料理を作つてしまります」

と、一応逃げるわけではないと宣言をしてから階段を上がり家にまで戻る。

そして台所の竈に火を起ししながら、作る料理の内容を決めていく。

(燻製肉は塩気が強いからこのままじゃ食べにくいだろう。なら削り取つてスープのダシにしようか。後、この粉物はパンを焼こうかな。日本で食べたような柔らかいものは無理だろうが焼きたてはおいしいはず。それとこっちの野菜は干しキノコからダシをとつて浅漬けにしてみようか)

和洋中華がじゅうやまぜだが、もつ氣にしない。

第一、日本の定食屋のメニューとか弁当とかもそういう部分はめちゃくちゃだつたし。

感性が日本人なんだから仕方ないだろ？

元日本人舐めんなよって意氣だ。

そして今まで材料すらなかつた為に発揮できなかつた日本人としての食への拘りをフルに發揮して渾身のメニューを作り上げる。

「出来た！ これが俺の究極のフルコースだ！」

まあそこまで言つほどものでもないが、日本人としての感性で作つたから、この世界でのまことに食文化からは多少は逸脱したものが作れたはず。

特にさつき味見した、白身魚のフライのタルタルソース添えとかはこつちにはまず無い料理で絶品である。

一応来客用の食器に盛り付けたがやはり供え物としては食器が微妙に見える。

だがせいいっぱいの努力はした。

後は冷めないうちに持つていくだけだ。

祭壇の部屋への階段を足早に降りていくが、何故か普段より体調がよくて足取りが軽い。

おやりくあの時たらふく食べたせいだと思つ。

栄養素が足りなかつたんだろうな、色々と。今までのあまりの自分が貧しさに今更ながら呆れてくる。

前に聞いたことがあるが、日本人は昔は寿命が50年だったらしい。

それだけ食べ物つてのは体調に直結する。

それに未開人は薬が異常に効きやすいってのとかも関連して、必要な栄養分が色々と足りなかつたために今回過剰に体調と栄養摂取が直結したんだろ？……

「お待たせしました。神様」

返事がかえつてくるはずもないが、一応気分として口に出しながら祭壇の台の上に料理を捧げる。

そもそも殆どの宗教が、返事もしない神様に祈りをささげてるのだから俺がこうして神に語りかけても可笑しいと言われる筋合いも無いだろ？。

「神様の為に精一杯がんばつて料理をさせていただきました。気に入つてくださいましたら先ほどお無礼はどつかどうか水に流してくださいよつね願いします~」

大げさにジエスチャーを加えながらひたすら口くち譲る。

「で、では、」ゆづくつ

なんだか態度にレストランのウエイターとか怪しいホテルの従業員とかが若干混じっているようだが、気にせず強引にします。こういつのは勢いが重要なのだ、そうに決まってる。

とつあえず逃げ帰るように部屋の入り口のまつまつ後退した俺は

祭壇のところに設置されている高さが人の背丈ほどの鏡、いわゆる姿見から

なにやらちんまい幼女が、じく自然と現れて、俺の作った料理をパクつとほおばるのを

見  
た

### 第3話 邂逅

ええええ、なにしてくれちゃってるのこの幼女は。

いや、といつかむしの娘が神様？

た、確かににか神々しい感じはするけど、御神体とかけ離れすぎだろ？

身長とか、特に胸のボリュームとかがA - カラエ + までかけ離れてる。どっちがA - かは察しい。

とつあえず状況把握の為に祭壇そばまでにじり寄る。

特に警戒される様子もなく、なんといつか緊張感の欠片もなさやつな雰囲気だったので更にそばまで近寄った。

「ほれほれほれ、おまつなし無邪氣な笑顔でこちらを見つめる女神様？」

近くで見ると、あの有名な 赤さんの成長後 と謳された写真の美

少女のよつな顔立ちである。実際は違つりしが。

「ひかりは金髪、いわゆるブロンドヘアだけね。

あ、ほっぺにタルタルソースついてる。

「え、えーと、お味のせいかどうが？」

「おこし〜！」

「や、そうですか」

「おいしいね、これ〜」

そついつてちんまい女神様が食べてるのは俺の渾身の作である、白身魚のタルタルソース添えだ。

あ、今度は鼻の頭にタルタルソースがついた。

「お兄ちゃん、料理上手なんだ？」

これは、この眼はあれだな。よく小学生とかに一発芸とかを見せる  
と妙に興奮してウケられて、そのまま尊敬されもみくちゃにされ、  
おまけに膝を蹴られまくるアレだ。

「えーと、はー……ありがとう。」

天使のような笑顔でパンにパクつく女神様。

ダメだ……あまりの状況に俺の頭はパニック寸前でどうにも事態の把握が不可能である。

この状況は、これからいつたいどうすれば良いんだ……

解決の糸口になりそうなこの幼女は食事に夢中で会話になりそうもない。

ところが、この無邪気な笑顔には、色んな質問とか小難しい理屈とかがまるで通用しそうに無い。

ぶつちやけて言うなら、手持ち無沙汰でこの場に居るのが苦痛である。

もうわあ、この幼女様が食事に一息ついたらストレートに聞いてみるしか方法はないんじゃないか。

ところわけでしまじめかーかーしながら（チクチクと刺されるような心地で）まつてみて、『JIGA』というタイミングを計つて聞いてみた。

「あ、あのー」

「なーに?」

「もしかして……貴方が女神様ですか?」

「うふー!」

「おおお、やつぱつ。あまつこも御神体とあんなことか……」

ヤバっ、最後のほうとか小さな声で言つたのに、今一瞬幼女様の眼  
が凍つたように見えたよ。この話題は禁句ですね。

「そ、そうだ。実は先ほどあそこのテーブルに置いてあつた食料を  
わたくしが食べてしまいまして。この食事の材料もそなんです  
けど。その節は大変たいへん申し訳ないことをいたしまして……

…」

俺は使い慣れないへタレな敬語を使って、深く頭を下げて素直に謝  
つてみた。が、

「あのテーブルの上? はお兄ちゃんのものだよ

「は？」

「だからね～、ここでお兄ちゃんがユニユーンとお祈りを捧げると、神様パワーが充電されて、あそここのテーブルにジュバッと神の実りが出てくるの」

「神の実りとはナンデスカ？」

「信徒へのふれせんと？」

「えええ、なんという太っ腹な。神様つて信仰だけ要求して何もくれないのが普通なんじや……」

「それ神様じゃなくて多分悪魔だよ～、『悪魔を信仰していることは世界に醜い争いが絶えない』ってたしかお姉ちゃんが言つてた」

「な、なんだつてえええええ」

## 第4話 使徒

「20年ぐらい前にこの辺りに来てね。バッシューンってこの神殿を作ったみたいで、その後はお風ねしてたの~」

俺はあれから素直にこの幼女様の話を聞き入ってる。

この祭壇の部屋は一応神殿だったようで、しかし神様ゆえのあまりの気の長さからか、作った後は興味を失い放置されて、そのまま20年ほどだらだらと寝て過ごしたそうだ。

それが今回俺が祈りを捧げたのをきっかけに眼が覚めて、更に美味しいそうな匂いがしたのでこつそり実体化して食べにきたそつな。

しかし何でこんなド田舎の地下深くの田立たないところに神殿をと思つて理由を聞いてみたのだが、「えへへ」と笑つてはぐらかされてしまった。なんとなくだが明確な理由がまったくなさそうに思えるのは俺だけだろうか。

もしくは思いもよらないようなとんでもない理由があるかもしれない。ほんとは無いと俺は思つてゐるけど。

少し考へにふけつて幼女様から眼を離していたが、気がつくとじーっとそれこそ穴が開くような視線で俺を見つめている。

なんというか、これは、尋常じやかない気配が漂つてゐる。

俺は思わず身をすくめる。

なりは小さくても幼女様は女神様、それを忘れてはいけない。

「すいーい、お兄ちゃん、珍しい記憶持つてるね

「一。」

まさか、俺の前世の記憶を  
読まれた？

「日本？ ジャパン？ ジャボニカ？」

「ジャボニカは違う。学習帳。いや、違くはないのか

なんだらう、いきなりシリアルス成分がめっちゃ大げさに吹っ飛んだ  
気がする。

つい死んだマグロの眼をして それはないの A A みたいな感じで  
手を振つて否定してしまつた。

刷り込まれた習慣というものはホント恐ろしい。

「さつきの料理はお兄ちゃんの故郷のものなんだね。わたしました食べたいな~」

「うーん、でももう材料がそこまでないから。材料さえあれば一応は作れます」

「なら今から出でたり? 祈りの聖句を私に唱えて~」

「聖句ってあれですか、ぶっちゃけ本当は聖句は知らなかつたもので前世でのを適当に唱えてしまつたんですが」

俺は冷や汗をだらだら流しているよつた心情で、まさしくぶっちゃけてみた。

「大丈夫。凄い祈りの力が感じられて、神様の力も沸いてきたから!」

「じゃ、じゃあ、やつてみますね。失敗しても許してね

「お兄ちゃん、準備いいよ~」

「では失礼して ていび まぐぬむ いのみなんどうむ しぐな すてらるむ にぐらるむ え ぶふあにふおるみす そどくえ じじるむ .....」

「凄いパワーが来てるよー 後は任せて！ ぱしちつだよ」

その時、視界を真っ白にさせたまばゆい光が！ なん

てことなく、ただ例のテーブルに視線を向けると、

テーブルとかまったく見えないぐらい食料品で埋まってるし。

てか、あれに見えるはレトルトのカレーじゃないか？ なんでもんなもんも混じってるのよ。

他にも日本製品らしきものがいくつか。メイドインジャパンきたわあ。

「凄い、凄い、いっぽいでた」「

「ちよつと出すぞ」と思われますが

「これちよつとお兄ちゃんの手料理が食べれるね！」

キラキラとした眼で期待されてしまつたが、しかし俺は、

「うーん、多分それは無理……」

「え？ 駄菓子なの？」

「いや、実はこれから自殺しようかとおもつてたり」

えつと、あまりのことに幼女様がぽかーんと口を開けて呆けています。

俺は今までの事情をとりあえず幼女様に説明することになった。

「うへ、うへ、お兄ちゃん可哀想……」

なんか自分が泣かせてしまつたようで罪悪感がハンパない。

「どうわけでも生きてるのも無理かもしないんだ。まあ祈りで食料が出せるなら食いつなぐことは出来るかもしねりけど税金とか払えないし」

「む」

「それと食料とかを売ろうとしても大量には無理だと思つ。村の中で売買用のルートが決まって不自然に多く売つたら怪しまれて、相場を崩した罪とか言われて商人どもにどんなめにあわされるのかすらわからないんだよ」

「むへ……」

「むへ」

「あつ、だつたらー。お兄ちゃん、使徒になつてみない?」

「むむむ? 神の使徒ですか……また随分と大事に」

「うん、多分お金も稼げるし、三食寝付きだよ」

「なつ、じこでせんな言葉を(まあ予想はつまくらナビ)……え  
つと、お願ひします」

「わ~い。使徒げつとだよ~」

「げつとされました」

## 第5話 魔法

「晴れて神の使徒となつたわけですが」

「ですが~」

幼女神様はニコニコと笑つて相槌をうつっています。

なんていうか、イイね。こうこうのは。

あまりにも荒んだ生活のせいで忘れてた感情が湧き出でてくるようだ。

「私はなにをすればよいのでしょうか? 使徒として

「美味しいものを作つて!」

「とりあえずよだれは拭きましょ~。幼女神様。  
後、それ使徒の役目違うから。

「いや、それ料理人というかコックというか

「『』飯、『』飯！」

幼女神様の背後に、勢いよく振られる小犬の尻尾のようなものが見えような気がするのは錯覚であろうか。

やるせない思いを抱きつつ、まずは溢れかえった食料品をチェックする為に下に降りる。

正直このままでは俺が食われそうでやばい。

手早く食べられてしかも美味しいものを見つけ出さなくては……

「幼女神様、これなるは桃缶でござります」

「桃缶~」

幼女神様は、高級な缶詰によく見られるペナペナのカバーっぽいのをペコペコと押して遊んでおられます。

なんといつ可愛らしやー。

爺は爺はー。

ひとつノコツシ ロリは空じいからやめるとして、

「食べてみましょつか？ しかしこれは冷やすと更におこしゅうひじ  
ざります。ですが冷蔵庫などはございませんから難しこうひです  
ね」

「冷たくするとおこしの～？」

「はい。それはもう格別に。爺やに魔法が使えば冷やしておこし  
げるのですが、残念ながら爺のクラスは 村人F だけで御座いま  
すゆえ」

「えいー！」

「ああつ、何をなさいます、お嬢様！」

なんだこれ、シビレバヒビレバ……

ああ、やっぱお嬢様と爺やIはウザったかったのか？

そして俺は意識を手放した……

「でも3秒で回復したわ」

「お兄ちゃん、もう魔法が使えるよ？」

「何ですとー。」

「さう俺はさつきの痺れでなんと、桃缶の魔法使いになつていた。もとい魔法使いのクラスを得ていた。」

「まだいまいち実感が無いのですが、さっそく魔法を使って冷やしてみることにします。」

「わーい、パチパチ

ちなみにこっちの世界、村人でも一応魔法は使える。

3時間ぐらいウンウンなつてると蠟燭の炎ぐらいの火がボーッと0.5秒出るぐらい。

……うん、役立たずだよね。

やっぱ魔法って憧れるから、結構練習はしたんだけど、どうやら詠唱とか技術とかよりもイメージ力とかクラスとか才能がものをいうらしくて、役に立つ程度のレベルにすらならなかつた。

しかもこっちの世界では魔法が使えるゆえに、科学文明の発達が遅れているという有様。

まあそうだよね。大体に現象に対しても魔力とかで計算していく結果

が出るのなり、しつかりした検証結果を必要とする科学とか発達しないのは当たり前。

とつあえず、氷の魔法……は、カチンコチンになると食えないし、流水の魔法……冬の川のイメージで……いや、これも水浸しになりそう。

ならば冷凍庫に30分ぐらい入れたときの、缶の表面に軽く霜がつくイメージが丁度いいかな？

「桃缶よ。我が意に応え、冷たくなあれ！ BE COOL！」

おおむね、なんか今までに無い感じで魔力が湧き出していくのがわかるー。

これが役に立つレベルの魔法の感覚なのか。

普段はジョボジョボとホースから水が出てるのを、ホースの先を指で潰して、勢いよくペューッっと出させのような感じ。男なら誰でもわかるアレだ。

それが右手に持った桃缶にまとわりついて、世界を変革していくのが手にとるよろしく感じられる。

たちまち、その手のひらには冷凍庫から取り出したばかりのような冷たさがビンビンに伝わってくるようになった。

「やりました。お嬢様、程よい冷え加減でござります。さつそく開けてみますね」

「～へせかせかへ」

「まつ」

ブルトップに爪を引っ掛けパコッと開けると、ほのかに甘い匂いが漂う。

「では、まずは爺やが先に味見をしてみます」

一  
え

「おお、これはまたたりとしてコクがあつて滑らかで……」

「む――む――！」

「白桃とシロップの冷たさが共に絶妙。口の中に含むと桃源郷に迷い込んだ気分です」

ପ୍ରକାଶିତ ଦିନାଂକ

「なんと云々至福。まるで秋山の魔法にかかつたかのようだ。」

「えいー！」

「ああっ、ガガガ、シ、シビビれれれ」

「ふーんだ！」

「こ、これはもしかしてさつものおおお。まままさかまたもや新しいクラスを手に入れちゃつたりしかやりますかがががが？」

「うひうひ」

やつぱねりですかよな。うん。

## 第6話 狡猾

幼女神様は只今二口二口と笑顔で桃缶を頬張つて、といふか桃缶の中身を頬張つています。

しかし油断してはいけません。

私は前回知つてしまつたのです。

この方が案外でんじやらすな性格をしていることを…

「では、わたくしめはいつたん住まいのほうへ戻らさせていただきます。これからも料理を作るために色々と準備する必要が御座いますので」

「うん。はやく戻つてきてね」

「出来るだけ努力はいたしますが、なにしろ色々と問題が山積みでして3時間ほどはかかるかもしれません」

「じゃあ、行っちゃダメ」

「…………」

でたよ、子供の我がままが……

『はやく戻ってきてね』と『行つちやだめ』の「コンボに微妙に萌えたのは内緒だが。

といふが、我がままが可愛いのは非力な子供がやるからであつて、神様にやられるとホントやばいよね。色々と。

仕方ない、ここは俺の老獴な会話テクニックを駆使して見事に切り抜けてみようか。

「お嬢様、今から上にいって、まさしく舌がとろけるような甘くて美味なるものを作つてまいりますゆえ、戻つてくるまではお待ちいただけますか？」

「行つてらつしゃー！」

ふつ、ちょりこな。

「では行つてきます。帰つてくるまでに口寂しくなりましたら、こちらの袋に入つたポテチなるものを食してください。パリパリとした食感が面白く、中々の美味しいで御座います。ただし食べすぎには注意ですぞ。2袋までにおさえますよつこ」

「ん、わかつた」

幼女神様に手を振られつつ、ようやく切り抜けたと内心思いながら、俺は選び抜いた食材を両手にござりさうと抱えて血らのアジトへと足を運んだ。

「さて、甘いものを作ると言つておいたから、いくつか用意はしておかないと。しかし基本的な調味料まであったのは幸運だな。これで色々と日本のメニューを再現できる」

そうなのだ。あの食材の中には、塩や砂糖のみならず、醤油や味噌、その他色んな調味料まで入っていたのだ。

ちなみに植物油は最初の食材の中にもあった。

ただ生クリームとかバターとかは今回は見当たらなかつたので、お菓子を作るのにも制限がかかる。無理をすればミルクからも作れそうだが今は機材も無いし、量を作りにくい。

そこでミルクと苺と砂糖が揃つてることに味付き、一品田のメニューは自然と決まった。

日本人ならおなじみの苺ミルクである。

作り方としては苺を潰してミルクをぶっかけて砂糖で味付けという

案外簡単なデザートだが、これは素人の作り方。

苺とミルクと砂糖が織り成す至高のハーモニーはこの方法では生まれ出でえないのだから。

完成した際に、苺の部分とミルクの部分、それぞれが絶妙な甘みを独立して持つてこそ本当の苺ミルクなのだが、多くの人間たちは砂糖味のミルクに苺を漬したもの混ぜただけのものを苺ミルクと崇拝してしまっている。

結果として、ミルクの人工的な甘味と自然な甘酸っぱさの苺が、甘いだけの苺風味ミルクとひたすら酸っぱく感じられる苺部分とへ味が分離してしまうのだ。ハーレーションを起こしてしまって、至高どころかただ癪癩を起こして暴れる困ったおっさん風味の味へと堕ちてしまつ……これは絶対に許せない。

まあ実際には あまおう などの高級な品種を使えば苺がミルクの甘味に負けずにそれなりのものは出来るのだが、苺ミルクには安物の苺を使うということは宇宙の真理であり、それに反することは恥ずべきことなのだ。そうに決まってる。

そこではまず苺の表面の甘い部分のみをスプーンなどで削つて分離させる。量的にはそこまでなくともいい。これはよく苺のムースなどで飾り付けに用いられる苺の部分に相当するのでバランスが重要なのである。次に苺の芯と残りの苺をミキサーにかける。ちなみにミキサーは俺の手作りだ。そこに砂糖を程よく加えてそのまま数時間置いて馴染ませる。

その間に削つた苺の赤くて甘い部分を、少な目のミルクとおおめの砂糖を加えてあえておく。イメージとしてはこの部分のみで練乳をかけた苺の味に仕上げるのだ。こうしてしばらく置いたまま、最後

に両方を混ぜてミルク部分の砂糖を調節して出来上がる予定である。

さて、次は何をしようか。

もう一品作る前に、ふとくらとしたパンを焼く為の天然酵母でも仕込んでおくか。

せつじて作業は弾み、3時間は瞬く間に過ぎ去りといったのだった。

カツカツと靴音を慣らしつゝ、祭壇の部屋への階段を降りていく。  
勿論、両手には至高の母ミルクを筆頭にいくつかの「ザート」がのったトレイを持っているのである。

「お帰りなさい〜」

満面の笑みで迎えてくれる幼女神様。おお、なんと神々しい……

しかしセレード俺はある異変に気付いた。

前は10袋はあつたはずのポテチの袋が、何故か今はどこにも見当

たらないではないか。

「食べてない」

「…………」

「食べてないもん」

「…………」

「お糞が生えて、飛んでいっちゃったの」

「…………まあ」

## 第7話 説得

「食べたんですね……しかもポテチをぜんぶ」

「食べてないもーん」

幼女神様は誤魔化す姿勢を曲げるつもりはないらしい。ナント嘆かわしい。

教育係として任されてから早10年、このまま性格が歪んだ女神様に育つてしまつたら、亡くなってしまった旦那様と奥様に爺やは顔向けできませんね。

「本当ですか?」

「ホント……」

ふむ、言動が小さくなる事や細かい態度などからみるに多少後ろめたさはあるようですが、

更生の余地はあるようです。ならば少し話さぶりをかけてみましょうか。

「お嬢様、わたくしめはあれらを全て食べてしまつたことを責めて  
いるわけではないのです。むしろお嬢様の身を案じてゐるからこそ、  
眞実を話していただきたいのです。もし食べてしまつたのなら本当  
にほんとうにホントークに大変なことがお嬢様の身に降りかかるの  
です」

「え……」

「お嬢様、気を確かに持つてよく聞いてください。まず第一にあれ  
らはジャガイモというイモ類から出来ています。イモ類は炭水化物  
という過剰摂取によつて脂肪になりやすい栄養素から主に成り立つ  
ています。つまり太るのです。しかも悪いことに胸ではなく二の腕  
やお腹がです」

「うん……」

「次にカラツと揚げるのに植物油を使用してゐます。これらは脂質  
です。こちらも基礎栄養素の中では非常に脂肪になりやすいもので  
注意が必要です。つまりめっちゃ太るのです。それはもう見事なほ  
どに」

「…………」

「そいつ忘れていましたが、イモ類は腸の中でガスが発生しやす  
く、大量に食べてしまつと……淑女としては恥ずかしいことにおな  
らを撒き散らすマックスユイーンになってしまいます。それはもうブ  
ーブーと……」

「え……」

「特にピザ味と記してあった袋、あれは我が古の祖国では『ピザテブ』という世にも奇怪な太り病を誘発する魔の食べ物なのです。勿論、爺めの忠告通り2袋までしか食べなかつた良い子であれば問題はない量なのですが」

「……良い子はだいじょぶ?」

「ええ。良い子は大丈夫です。なにしろ2袋ところのは爺めがお嬢様の基礎新陳代謝から華麗に計算して弾きだしたお嬢様のお嬢様によるお嬢様のための数値ですから。用法用量を守つて正しくお使いくださいといふことです」

俺は大げさに両手を斜め上に広げるよつて、自分の論が正しいことをアピールする。

イメージとしてはカラテキッドのあのポーズの手首を曲げないバージョンに近い。

更に駄目押しどばかりにビックと人差し指をあげて追撃をする。

「しかし…………良い子でなかつた場合はー。」

「ば、ばあいは?」

「ハート様になつてしまつのですー。」

「…………ハート様?」

「わたくしめの記憶をご覧いただければわかるでしょう。あの存在感、こればかりは爺やをもつてしても言葉で語り合へせる血縁はありません」

「…………うん」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「うえええええええん、ハート様いやああああああ

「坊主、見ない顔だな。なんだその貧相な身体は。魔法使いか?  
にしてはローブも着てないじゃないか」

「いやー、アハハ、色々あります。それはもう色々

「まあ細かいことはいいやな。ダンジョンエクス庇へようこそ。歓  
迎するぜ」

「ありがとうございます。頑張ります」

いやー、まさかケンシ ウを予想外に気に入った幼女神様が、格闘  
家のクラスを与えてくださつて、更には鍛え上げるためにダンジョン  
まで送つてくれるとか、なんという急展開。

以下はその時の状況のダイジェスト

「ハート様も悪くないですよ？ あのたっぷりの贅肉でなんと衝撃  
無効のスキルもつきますし」

にへらつと笑いながら言葉の追撃をする。

単純に太ることを悪く思へのではなく、あえて捻つて良くなうこと  
で攻撃力を倍増する。

この妙味。元来の性格の悪さを「アド」として、その本能から迸る予測  
不能な攻撃を仕掛けたまに無想技。

並みの者には真似できません。

「ハート様絶対ヤツ！」

そして話はケンシ ウのかつこよわくと移り、

「かの者の技と同じレベルの技を再現するにはせめてスペシャルラ  
ンク程の格闘家のクラスを持つていないと無理ではないかと思われ  
ます。」

「えい！」

「あがががが、またですかががが、シビシビれないよつには、出  
来なななな

「できる～けどまんない～」

んで、ダンジョンへ送つてもらつたときは

「実はうちの村の周りの低レベルの魔物の出る土地は全て村長一派の管理下にあります。無断で狩りに行くと処罰されます。それ以外の魔物の出る場所は強すぎて自殺していくようなものです。よつて強くなろうとしても手段が無いのです。……」

「大変なの？」

「まさしく四面楚歌です。いや、どちらかといつも方塞がりの方が爺めの状況を言い表すにはあつていいのかと」

「じゃあ狩りにいくのにお姉ちゃんがいつも居るダンジョンを使えばいいよ。今送つてあげる~」

んで用意も出来ず飛ばされて、ダイジヨスト二ノ間まで。

飛ばされではみたものの、これどうやって帰ればいいんだ？

無一文だしヤバいよね？ 僕……

とりあえず今居るのは、帰還用の魔法陣型ポータルの前。

おわりくダンジョンへ外から来る人間やダンジョンから帰ってくる人間用の目標地点として設置されているものだ。

そして目の前には小規模の街とも言える程の建物の群れが広がって

いる。

その周りには城壁というには大げさだが、柵というには立派過ぎる  
日干し煉瓦製と思われる囲いが見える。

「おお、これってあのダンジョンゲームにちょびつと似てないか。  
もしかしてボッタクリな商店とかあつたりして」

とりあえず帰還に関してはじたばたしてもはじまらないし、幼女神  
様が呼び戻しをしてくれるのを期待しておこひ。なんにせよ今は金  
策の情報集めに街の散策といきましょか。

んじや、まずは手始めにあの見るからに道具屋ですつて感じの看板  
を出しているお店を覗いたりしてきちゃおつか～

ふむふむ、なるほど。「セーラ道具店」かあ。

いかにも美人で綺麗なお姉さまが店主つてな雰囲気の名前ですね。  
賞味期限切れの可能性もありますが。

それならまだしも筋肉ムキムキで髭もじやのオッサンが店主だった  
ら俺は泣ける自信がある！

どれ、店内をちらりと覗いてみましょ。チラッとね。

おおおつ。

上品な感じにまとめられた店内のカウンターに座るは、

プラチナブロンドの髪に美しく優しそうな眼差し。少し落し気味の眼鏡が知的さをかもし出し、胸は少なくとも平均以上はあるように見える、エルフにすら負けないほどの美人なお姉さんではないですか

これは反則だろーと叫びたい。良い意味で。

つて、こつち見た！

うわっ、微笑んだ……

…………女神様だ……本当の女神様がこんなところに降臨していたとは。

今俺の顔は傍から見れば茹鶴のように真っ赤に染まっていることだろう。

決めたつ！俺はこの道具店に毎日通うことにするぜー

我ながら男は単純だなと思った瞬間であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9140z/>

ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

2011年12月28日23時18分発行